

意
雜
乃
記
前
集

下

種	一	十	卷	下
第 八	第 七	第 六	附 評	第 五
先 阪 外 訛 分	幸 稚	浮 瀨	孝 女 花 雨	う ら な ま ら し 打
			護 書 の 益	實 録 の 語 脱
				以 年 易 牛
				以 張 瓦 名
				天 狗
				笑 三 郎

曾
122
2



門小節
部 122
卷 2

荒木藏

烹禱の記前集卷下

全
土
字

夷三郎

荏土

瀧澤解

編纂



えびまの神の事世ふはさめぐみあり近二病七福神考と
えびまの ままよふ ままよふ ままよふ ままよふ ままよふ ままよふ ままよふ ままよふ ままよふ
 いりのみ清説とあけて詳に考證せらるるものなり
いりのみ 清説 とあけて 詳に 考證 せらるる ものなり
 漏せらるるものあり西宮澳夷社と太田の所産るる蓋乗
漏せらるる ものあり 西宮澳夷社 と太田の 所産るる 蓋乗
 蛭見吟心而現漁翁神代傳 受記 彦火と出見そのの
蛭見吟心 而現 漁翁 神代傳 受記 彦火 と出見 そのの
 海濱ふさまよふいのみ時小事勝神亦名と鹽土翁と現し
海濱 ふさまよふ いのみ 時 小事 勝神 亦名 と鹽土翁 と現し
 道守車ありこの説古記よあはれあや云云又怪見吟心の時
道守 車あり この説 古記 よあはれ あや 云云 又怪見吟心の時
 感して出現するはと太田命と夷と馮夷河伯と磯釣し
感して 出現する はと 太田命 と夷 と馮夷 河伯 と磯釣し

現る時澳の別稱とて世間愛比須と蛭見と混同すひるこ 蛭見の
 夷社えびのやうとて愛比須へ蛭見吟ひるこの時小出現の神太田命を
 所変るよふと神社又平康頼流人ひらふらとて時硫黄湯いりまのうを去ると
 五十町小離いそぢのちりあり紫岳むらたけと彌やまと彼かの小夷えび三郎さんじやう乃すなは祠ほくらあり
 岩殿いわのどのと稱なづと康頼かたよりとて祝詞のつとせらるるなり
源平盛衰記又安あ法は師しが
 歌うたハ世よ代しろとくふえびよの神かみの誓ちかひのりらさの物ものと数かず
廣田社二十回番歌合又藤鹽草ふじのしほも西にし宮みや海老えび主ぬし世よ代しろ
 救すくふとよむとありとて歌うた合あひのりのり云云いんいん日本紀通澄にっぽんきとうじやうハ
 拾玉集しゆぎふの慈鎮ちぢんの歌うたを引ひとる西にしの海うみ小風こかぜを移うつせし西にしの宮みや
オホアナムチノココトエロヌメノあづまのまやえひとさふらふ又大己貴おほおの子こ事こと代しろ主ぬし神かみ遊あそ

行マシテ在アリ於ニ出雲國いづみ三穗さんすい之の濟すけ以テ釣魚つりうし為シテ樂たのしみ又或説あるは
 云い三十四代さんじゆうしよだい推古天皇すいこてんかう九年三月くわんねんさんげつ聖德太子せいとくたいし始はじめ
スベラチカヒルコニナシテ市賣いちばい術じゆつ誓ちか蛭むし見み為シテ商賣しやうばい鎮護ぢんご神かみ後世ごせい以テ愛比須えびす
アガハ崇福神すうふくかみ自是始みづか始はじめ又西宮にしみや鎮坐ぢんざのりの神かみ記き乃すなは舊傳きゆうでん
ていけいるる定家卿ていけいけいの假名遣かりなぢのの惠比須えびすの字な多おほ一いつ條じやう囚人いぬ
あいのうみ四夷海邊人しよえいかいへんじんと和信わしんとてエビスえびすとの蛭見むしを指さてエビスと
あつこいいるる上かみ古ふるああととままるるかか取とりり
あつこ解とけとるるに中葉ちゆうえつより夷えびの神かみと唱なめめるるのの蛭見むしとと彦火ひこ
あつこ出見尊しゆけんととままるる慈鎮ちぢんの歌うたも夷えびととららぬぬ侍さむらい又三郎さんじやうととららぬぬ
あつこたたままるるが如ごと死しへへ蛭見むしるるがが神代卷かみしろ云い伊井諾尊いせいだくすん伊井いせい

新編言卷下

二二

冊尊已生大八洲國及山川草木於是生 日神

次生月神次生蛭見雖已三歲脚猶不立故載之

於天磐櫛樟船而順風放棄之 日神の第一よと

中次月神の第二蛭見と三郎ありあふ夷三郎と稱と

さく蛭見とえびひとと稱するゆへこの神厄弱不具あ

三歳ふるちやで脚のたちあふざればるりよとぶと物

異なるや紙指てえびひとといふま

天朝の古言あり安齋翁の隨筆小華と云と四夷と

異と次あふ夷蛮狄戎とねえびひとと訓匠人紙と裁と

角のちとる紙ととる裁漏せその角出て餘紙と

因ニ云 紙ト云 漢一 紙ト云 内カ紙 毛ト云

名物六

帖引

本草

戴

異なる紙世保えびひと紙といふも抄のどと云と

按る小世俗とて物の圓かたは方あると云紙指ていびつと

い亦是えびひとの義といとと通じ又かたはむく東をえびひと

いりりの奥羽の邊鄙近塞の地あるれば京様と云は華

比まぶそのざる異なるあふあづまえびひとといふちの奥羽

のふあは八隅の國といふがさら近江あふ夷長を云れ

り國史ふんえと

厄弱不具ある紙りてえびひとといふ神とるあり又この神天磐

櫛樟船よふたれて順風放棄られ遠く峰を宿と云

そのざは同胞の神とあるあふ異なるあふえびすと云うさん

文德實錄卷十の十六面天安二年夏五月己卯の條下を考ふべし

あめのつみ

あまのつみ

あまのつみ

亦そのよりあり 怪見の釣と好まぬと入事ハ紀よんえ孫
 ども既ニ海濱ニ漂流しゆら又海の幸を獲ぬらん且厄弱
 不具あるにやうしてたや世災避ぬるハ榮枯得失不ばきさて
 一切煩ひば 莊子ハ所謂標社の樹そのまゝ用ふるはめて
 壽子ハ如く直真の福神ハあはばや世倍々福の福する
 所以とまらば福とめて富の義と次謀まるふぬらん凡人間
 生涯の福といハ榮枯得失の文と脱して無事なるにま
 りのありまらるふ今彼が福とよる所と捨て我欲とらぬ富災
 行らばこそ甚し死惑ひよあらばや
大黒と大團玉命ハおんはまの
 神久く大八洲と管領ののい
 天孫小返ハあはさる時一旦ハ拒ひ
 理の拒ひてうらむを
 知るやとあはく返ハあはらハ世と避く始終の福を全く去らぬらん

直道ハ真の福神あり又布袋和尚のどき徳とつと光と理と生涯
 食して世智を欲ふとらんハこそ由まの福和尚ありとの條毘沙
 門天辨財天福祿壽星ハ至りてんらん又當今うえびと乃
 七福神 考よんえとまらば今うらむ賢
 神像と観る小釣竿と存るハ鯛と左ハ抱き無目籠を俵に
 置て履小尻とめりて下めらの像と化まるりのうらま
 志す神と釣竿と鯛とめて援とよると死ハ 彦火々出見
 する小狐と書紀の神代巻と按する小見火蘭降命と
 自海の幸有と才 彦火々出見するハ自山の幸有けり
つひはあはくえて
 つひはあはくえて
 つひはあはくえて
 始兄弟二人相謂曰試不幸と易人と欲んとて遂相易之
 文に其利を得ぬらば見悔之弟の弓矢を還して己が釣を正
 弟ハ既兄の釣を失ひゆら訪覓不由るハ故別ハ新釣を

へりてはと興之のふ肯受むと故釣を責まらぬ
 彦火と出見その憂苦甚深行海畔不吟多ひつ時不塩土
 老翁と逢ぬ老翁問曰何故あり此は在りと秋のふや對のふ
 事之本末以と老翁曰勿復憂吾當為汝計之乃作
 無目籠内彦火々出見尊於籠之中沈之于海
 即自然可恰小汀あり於是籠を棄て遊行忽海神
 之宮ふ至のふと不返ふ海神因問其来意時彦火々
 出見尊對以情之委曲海神乃集大小之魚逼問
 之食曰不識唯赤女赤女、鯛、魚名也比有口疾而不来固召
 之探其口果得失釣云云

えづー今のえびどの神像の釣竿を存ふー鯛魚紙左
 目籠を傍ふおたるまで彦火々出見尊失ひひ
 釣を密に海神の宮ふ赴き赤女の口中を探りて失る釣を
 獲もひ形勢ふ細る且彦火々出見尊の弟あてす
 ませども兄火闌降を起て大八洲を御しればこそ天皇の
 福種をそとるるれとのやうに稱ふは細れども
 彦火々出見尊ふとたのえびだと唱るふよりけり余が
 臆度せりてこそを辨むるとたのえびどの神の捉見あづ
 安ん法師がえびどの神の世にたのえびどの神の
 まるをあらばり車勝神一名の塩土老翁彦火々出見尊をたすけ
 うが彼神を指て世にたのえびどの神とよめる故又彦火々出見尊天下
 めて世をひろく惠せめひうが彼尊をえびどの神とよめて世にたのえびどの

房總志科三卷 上総の夷瀨郡山田村 小時兩臺と云ふ
 如あり山、上ふ
 不動と安と近
 多、彼如の農
 夫相川其と
 みのり山禁と
 葎とあり一ふ
 高六寸許ある
 銅像と掘出せりその体甚古質ありて重六百四十量あり



何の像ありし歟と云ふは其の形頭小僕頭やうのみの歟哉
 直衣と袴と著し左脚と些斜みせり右の掌の中は穴あり
 えびとの古畫と云ふは甚相似たり右の掌の中は穴あり
 竿と著し穴と云ふもえびとの像ありし疑ひなり 側
 字に森あり森の中は 日の神と云ふなりといふなりは彼
 神祠中のりのあるべしその圖はこゝに載とらる
 えびとの像ありあなるべし羅山先生の説は因と云ふ金毘
 羅の像ならん彼山上ふ不動と安とあるとありて推量と云ふ
 之れは不動と金毘羅とありてあるべし七福神考にも
 大黒の袋と負像と取て大已貴命とせば愛比須へ金毘羅

神と云ふ。つとまるとるれば金毘羅の像日光山ありて烏帽子袴と著て夷居體あり叡山よあり又おれどと羅山先生の記みんえとるよつとめれば房総志料不裁とるえびとる像由金毘羅ある欽但件の像と金毘羅ととるも審ちのらば金毘羅へ天台耆闍崛山の神王ありて讚波の南月堂三心寺が金毘羅靈驗記増一阿含經天台妙文句法苑珠林大寶積經金毘羅天童子經等引てつとるこれ考證せし烏帽子袴の本邦の平服と云はれ天竺乃金毘羅とすつとるの衣と云はれ但金毘羅へ三輪の神ありと云説あるふよるあやされば七福神考あり大黒と大己貴

命と云ふとれへ愛比須へ金毘羅神と云ふある佛説の外に金毘羅と稱する神ありやとるゆはにそのまはれかくれ原金毘羅の像あるはえびとるの神の像とせむは次く非あり貫之の像とめて菅家の神像と孔子の像と岡麿ふとるものつとるべかれ恨世ふ多し夷の假名のえびとるありまうる中茶久りえびとと書ふは懐るつとるえみとつとるみとひと志とすと相通るればてえびとるの書記 垂仁紀に江美志又愛滌詩私記に江美須 敏達紀に毛人を江比須大毛人云とあれと惠美志とも惠美須とも書るものねえと藻塩草は海老主とある

海老の假名えび和名鈔小鯽和名衣 此注俗用海老三字 うろくえの假名を用ふ

登一初ふも辨さるどくえびとよ系流より邊鄙を指雅

俗と指とばあてしきとんるんるめのみるんべ得不見乃

義あじしや常あるりのとりどもつま異あるりの死バ

あえてえみととの壁言が邊土の浮浪人官中り爵中り

只その強勢とよめて横はし動とんべ國司の命は殺りの死

朝廷より俘囚と叫より奥の阿陪頼時が頼子の身富との

ども俘囚よりこれらの浮浪人の囚とくめとれども犯とて

必囚とるのどとりのみるんべとんるんるめ浮囚との漢土とて

北狄と北虜とも又只虜とのこるもあるどくえびとよ

虜とせざれども境を犯とて死の必虜とよとりのみるんべ

めて虜と叫より俘も虜も和訓えびとよ彼常あるもの

つども奇異ある死のやめてえびとよのみ死とてふ準てあ

へあるるに物子の孔子の係あ賀して日本夷人物茂卿と書さ

あのみ其ま恨みて非礼のう死りあるも曩不安斎翁の隨筆

及村田翁の時文摘紙論とられう死人のあるところも

姑く童子等が為みのもの

天狗以悪見名

天狗のよの先達組とて死辨たりあるれども物子が天狗説

尾張の僧諦忍が天狗名義考平賀生が天狗辨乃若こ

或その文洒落よみて事實を撈る小星は或ハ牽強附會
 多く却穿鑿不疎く解ハ孤陋を以て史を博みあらねど今
 管見を以て諸説と相衷し世の童子等が惑を解の抑天狗と
 多りの和漢一るは星る夜又飛天る山神あり獸あり
 山魅ハ冤鬼あり但當今和俗のとき天狗と喟るものなる
 天無鬼といふほどあるおその説とて考をせば善福一悪禍と
 麻羅羅波旬釋迦の時魔王の名と同トか次あらばこそ何物ぞ姑く
 置て論ざるものなり舊記を参考しめて世の童子亦よ
 曉しむ

第一證大狗ハ元來星の名あり和名安麻通止菟祿又安

麻津記通年書紀 舒明紀九年春二月丙辰朔
 戊寅大星從東流西便有聲似雷云云於是僧旻
 僧曰非流星是天狗也按衆畧記作九年丁酉當今流布の書紀
 ろハ天狗をアマツキツネと傍列せりトトネキツネ音通ハ
 ろる又史記天官書二十云天狗狀如大彗星孟康曰
 有尾旁有短彗下有下如有聲其下止地類狗所墮
 及炎火云云吳楚七國の反くと死吠て梁野を過る
 年のこと
 又晋書穆帝升平四年十月云云通鑑大全宋欽宗靖康元年六月云云
 唐書昭宗の天復元年五月云云佛祖通載宋理宗

草木子 卷三 元正 元年 天下 昇平 司天監 星墜 血食 同五千 日始 楚通 奔越 云云 与下文 併見

端平二年云云とて天狗星の墜るより後裁と
如見が怪異辨断及尾陽の諦忍が天狗
名義考よこまら引とれハ今幸文を録せむ
樂紙弄事といふ後よ何くも亦も亦も新座を座の
田樂共十餘人忽然とて坐席不列て舞歌ひる將有て
拍子及聲を舞声とせば天王寺のヨウレイホシとんをやとぞ
拍子ける云云城入道取る物も取あむと大刀を取てその酒宴の
席不墮と中門とありや歩ける是と變化者の搔消やうふ
失せ相摸入道ハ前後も去るに醉臥より燈と挑させ遊宴の
座席とるふ滅ふ天狗の集りたるよと學んて踏汚る思置了
上は禽獸の足跡多し云云とまの今俗ゆふ天狗は狐とんれど

この妖怪が天王寺の妖靈星とんをと歌ひとあるふ就て
あつは是則天狗星の地不墜て人間は血食とるあやあらん
どらんえの至正元年天狗星地不墜て人間は血食せし
草木子卷三 四十ふんをえとる
佛教を標録せ
第二燈佛説ふ所云天狗ハ夜又飛天るり地を經ふ夜又
天狗とある紙先達見牛を物ふとるせうぐ人會天狗ハ彼經文
より出るといふそ又偏見るるげ千五百年末世といふ天狗ハ
果て地を經より出ると否澄据るるの定うあつひがじ但
佛者の説とて天狗あり地狗あり地狗ハ狐のるあや書紀は天狗と
あまつさるねと訓ふるふ由とれハ天狗といふ夜又を指地狗ハ妖怪

指とらんも誣らうとせどまうれども予のいふごとく本文とる考む
 只る所の僧正慈愍の記は出らう愚管抄卷七藤氏の之を
 評せらるる履みこまの一定大菩薩の浄たをひう天狗地狗の
 又まうと疑ふべし云云同書卷六は兼仲と中ゆ一者の妻ゆ
 かるるのち出ゆらうそれゆも物なるのたうんを物のゆは必狽天狗
 るとす物ハ又ゆこするれが云云或ハ天狗地狗とるる生一或ハ狽と
 天狗とを一對とてまうらうと認ると此の地狗ハ狽のるるべし
 権僧正慈圓ハ法性寺忠通公のおん子みそ建之の比天台座主
 たり嘉禄元年九月廿五日愚管抄ハ彼慈愍の著述るる上
 いひ傳ハ碩学宏才當時ふ高き僧るれば天狗地狗の

説必正ハ死出知あべし
 第三證山海經ハ載る所の天愚ハ山神之又獸之同書卷
 五十八堵山神神ハ山天愚居之是多怪風雨其上有水
 焉名曰天搨音又卷二二十陰山有獸焉其狀如狸
 郭璞曰或ハ作豹而白首名曰天狗其音如搨々可以禦禍又
 博聞錄云山陰有獸狀如狸首白喙蛇名之天狗
 又杜子美天狗賦云夫何天狗嶙峋兮氣獨神秀
 色似狡狴小如猿狖忽不樂雖萬夫不敢前兮非
 胡人焉能知去就博聞錄以下運敬谷御書集唐山
 みて天狗と名けらる獸ハ或ハ狸ハ類一或ハ獅子ハ似て小るるを

因云 宇治拾遺物語 卷ノ一 第四段 八ノ大 山

猿狖のどくあるとた名を同くしてその物異なり譬が雷と雷獸の如し

第四證唐山池州の山魅一種此より天狗の形状不似るもののありその物人小類く牙長二丈許面の闊さ三尺餘長ハ三寸不倍く披髪あり鳥喙あり二翼ありとより果く実あるべし此方少の天狗と甚く相似たりと左に證を廣西通志云池州近山地牧童十餘人聚而戲或歌或舞吹笛情方洽忽見山半一人約長二丈面闊三尺餘長倍之披髪鳥喙背有二翼倚觀群童為樂嬉然而笑少間垂舌長過腹群童大驚皆反

鬼 痛と 類この 物語不 狐

走其人能夷語連呼曰合合合勿驚勿去乃歌舞吹笛以樂令群童復聚吹笛歌舞焉其人喜拊手大笑聲振林樾已而復垂舌如故久之乃去遂不復見又馮夢龍古今談概曰有術者哭云吾見為天狗所殺其云云又元伊世珍瑯嬛記曰君子國有鳳凰嶺出天狗一名胎詹又唐李綽尚書故實不十家の見天狗のどくあるもの不攪且るありこの三ヶのありの既小桂林漫歸不我より今畧之第五證保元物語及太平記不所謂天狗ハ寃鬼あり保元物語卷小この君 崇徳 怨念ふよりて生るから天狗の姿ふさむせのひ

けり云云同書同又云人の爰あ 瀨波院と輿う不棄ふあり為なり
 判官はん子こ共とも相あ具ぐ一いつ先陣せん侍し平馬へい助すけ忠ただ正ただ後陣ご少すく法住ほふ寺てら殿どのへ
 法ほふ住ぢゆうのの西せいのの門かどより入いるる人ひとととるる為なるる為なるる門かどととるる不ふ動どう
 昭王しやう大だい威い德とくのの固こ給たまひて入いりかかととチちセせバばささバば清せい盛せいがが許ゆるへへ全ぜん
 追おひひとと仰おほけけ且かつ西せい八はち條じょうへへありありとと云いふふ
 又また太平たい記き五ご負ふ和わのの比ひ往わう末まつのの禪ぜん僧そう夕ゆふ立たのの西せい紙し仁に和わ守し乃なり
 六む本ほん枚まいのの下した小せう遊ゆうて怪かい異いととんんととるる股また小せう夜よ痛いたくく深ふかくく月つき清せい明めいととるる
 見みままバば愛あい宕たうのの山さん比ひ叡いのの獄ごくのの方かたよりより四し方かた輿う不ふ棄きけりりのの虚こ空くう不ふ
 集あつめててけけ六む本ほん枚まいをを指さしてして並なら居ゐるる云いふふ座ざ中ちゆうのの人ひとととんんととるる上じやう座ざ不ふ
 先せん帝てい後ご院いんのの外がい威い威い峯ほうのの傍かたわら春はる雅みやび番ばん際ぎはのの衣え不ふ如ごと裳せ裳せ衣え

くりて眼まなこハハ如ごと日月につげつ光ひかりりりりり嘴くちばし長ながくくとと鳥とりのの如ごとくくるるがが水みづ晶せうのの
 珠たま数かず爪つめ操さうてて坐まりりりりのの次つぎ小せう南なん都とのの智ち教きやう上じやう人にん浄じやう土ど寺てらのの忠ちゆう圓えん
 僧そう云いふふ左ひだり右みぎ著ちやく坐ざ志しありり皆みな古こ見みなりり形かたちみみてて有ありりががらら眼まなこ乃なり
 光ひかり常じやう小せう習じゆててたた右みぎのの服ふくよりより長なが翅つばさ生なま出でりり往わう末まつのの僧そうこれこれととんんととるる
 怪あやししやや我われハハ天てん狗く道だう不ふ落らくぬぬるる將まさ天てん狗くのの我われ眼まなこ不ふ遮さるる致いたとと肝かん心しん由よし
 身み小せうををりり目め由よしととるる所ところ守まもりり居ゐるる程ほど不ふ又また空くう中ちゆうよりより五ご緒しよのの
 車くるまのの鮮あざるるふふ字じををてて来きるる客きやくありり榻たたをを踏ふみみ下くだるる紙しととんんととるるハハ兵へい部ぶ卿けい
 親おや王わうののいいまま法ほふ體たいありり所ところ座ざありりしし所ところ親おやららりり先せんよよ座ざししてて持もち
 有ありり天てん狗く共とも皆みな席せきをを去さてて踏ふ踏ふととんんととるるのの両りやう鏡きやうハハ人ひとのの死し後ご慈じ念ねん不ふ
 よよくく天てん狗くととるるよよくく紙しととんんととるる

右澄たる下の諸説一定なるべしその好む所よりその
 流に泥る天狗の如此その物よりあるんごつて却天狗の天狗
 所以を解さる小知より今得のい天狗の星ありて獣ありて
 寛鬼おららざり五百年前小僧徒のい出せし譬諭ふて佛
 説は夜叉飛天を天狗といふ事つて魑魅罔兩と天狗といひ
 又精よく寂慢慢貪破戒無慈の道信を天狗つて又直天狗と
 名つけしあざり笑ひいへるやうて天狗道るいふこと出たふら
 と其當時の流に云茶あるが今に至りてい止まば画者その形状を
 圖より小至て人身を喩ふて左右の脈を翼と添へる翼と
 則飛天夜叉と象するものより加ふる兜巾を戴せ篠被ふ

金剛杖をりて六刀を佩せし後驗者小擬しるあり左
 つふとるれば大凡後行者の流を汲むもの吉野葛城三熊野
 羽黒るんどよとて靈山へ登る級りて身の勤とよと教められ
 和名をかきいへんと又山よりへともいへ俗に山伏と唱ふとい
 縁ありのるれば魑魅罔兩小撮合して天狗の圖をなせし
 かれば天狗のよとて画の謎々といふものいひて譬は漢の画家
 雷公を圖する小連鼓を負したる王元がる如く今古和漢
 その俗同し 論衡卷六 雷公之状 雷公之状 如連鼓之形 又一人
 カ士之容 謂之雷公 使下之左手引連鼓 右手推連鼓 若
 若擊之 狀其意 以爲雷聲 隆者連鼓相和 擊手之
 意也 云云 明傳の俗画工雷公を圖するを云ふカ士の下に
 きて二の翼ありて連鼓を背し負へるの状 夜叉飛天の如く 頗け方

天狗 圖

荆景琴三山の神
山海經卷之五の二十六葉の
つせつ 圖説出



その名定りぬらざる
りのことおもひの
ゆるがしき図と
この餘天狗星
夜又飛天及
皆山
の神
天馬の

唐山池州の山鬼

廣西通志載



國俗所云天狗

陰山の天狗

二月の
二の
の
の
受條
さるひ
さるひ
さるひ
時二のつそあ

▲笑ふと死
その子これ
て腹ふい

春亭画

あつち
まぐく國
本文よつて
考ふ

陰山の天狗
山海經卷之
九四葉三出

白鶴童

の國
唐山の
繪
金剛
起馬
ふええ
まう



杜子美所謂猛獸天狗

まの獅子の
さる
さる
さる
下
わんわん
万ま敵



山陰の天狗

博
理の如く
白蛇



此は物
美徑記
太平記の
後よ
りつて
世俗
に
これ
花の
雲

人我事みんがこと々まじりね天狗てんこうあり由断ゆだんまぐら又按おんする小天狗せうてんこうと後驗ごけん
 山伏さんぶつの傳でん不ふ唱なむむめめるるるる平記へいぎと奉ほうとと天狗てんこう越こ後ご誓ちかと催もよほ
 既すで又また貞和しんわ五年ごねん四條しじょう河原かはら田樂でんがく結むすの殿のどのと考かんがへべ
 平家物へいけもの諸もろ不入ふりいれ道相みちあいに團だん益えき豊とよむむれれ比ひ六むの南みなみふありて
 人ひとあぶあぶ二ふた十じゆ人にんむむろろと多おほくくててくく中ちゆう水すいありあり瀧たきのあとのみ
 拍子びやくし衆しゆうああののててままいいむむどどろろと笑わらふふ声こゑけけるる去さぬぬ正月しょうげつあり
 上皇じやうかう高倉たかくらかかくくままととせせめめひひて天下てんか涼園りやうえんふふるるぬぬくく一いち函ほん
 月つきと隔へて入道にゅうだう相あいに團だん豊とよむむれれぬぬるる死しのの者ものももつつろろううとといい
 ぶぶららささつつととぬぬくく六む天狗てんこうの所ところ為なるといいふふととああてて平家へいけのの事ことあり
 どの兵へい百ひやくよよ人にんとといいふふてて多おほくく付つててままじじりりととららぬぬ院いんの所ところ所ところ

法住寺ほふしゆうじ殿どのあり三年さんねんへ院いん由ゆつつててせせめめるるむむ清所しやうじよああぶぶらら
 飯前いひぜんのの前まへ司し基宗きそうといいふふ者ものありかかのの基宗きそうかかおおままつつるる者もの共とも酒さけと
 ちちららああららああららああららののままけけががかかるるおおままりりふふままりりせせととええののままけけがが
 けけふふええひひててくくああらら舞まひおおどどろろとと六むととのの兵へいどどもも毛けとと吹ふ付け
 ころと推おしよよせせ酒さけええひひ共とも二ふた三さん十じゆ人にんくくああららつつてて六む波なみ羅らへへおおててままるる
 原平げんぺい益えき衰すい記き
 文ぶんとと此こゝ同どうととままらら今いま俗しやくののふふああららののつつれれとと
 東鑑とうかん天福てんぷく二年にねん三月さんげつ十日じふにち記き云い去さ二月ふたつき比ひ南都なみたう天
 狗けんこう現げん恠け一いち夜や中ちゆうにに於お入い家け一いち千せん餘じゆ字じ書しよ三さん字じ未み未み不ふ
 云い云い非ひ短たん慮りよ之の所ところ覃おん尤なほ為な奇き恠けととままらら中ちゆう紫むらさ乃の俗しやくののふ
 物もののの怪けるるりり

故事論コト卷マキ云ク貞觀七年比ヒ深疑シカク忠仁公ノ所ト女メ十リト后キ為シ

天狗被惱サレ稍經シテ數月シテ諸有驗シ僧侶ノ無敢能降ル者ト天狗

致言曰ク云ク云ク道ノ中ノ塔ノ小ノ物ノ怪ノ俗ノのノ死ノ矣ト云ク云ク

同卷小叡山ノ平燈ノ大德ノ阿弥陀房ノ阿闍梨ノ靜真ノ師ノ言ク

沈上阿闍梨ノ皇慶ノの祖ノ師ノ言ク或日朝ノ小河屋ノ小居ノ言ク

足跡ノたゞりノ蹤ノ跡ノぬル弟子ノ共ニ天狗ノあるトの取ル言クやらんとて

暫シテハ求メけル且シテもシ道ノ中ノ塔ノ小ノ物ノ怪ノ俗ノのノ死ノ矣ト云ク云ク

又同卷小園東北條ノ孫ノ小女ノ絶ニ入リ俄ニあリけル且シテバ然ルズ

驗者ノあるトもシ折節ノ忠快僧都ノ経廻鎌倉ノの取ル言クけルれバ

清クてのゆゑんと考ヘるト小女天狗ノ付キ種ノノ事ノ叙シひけれバ云ク

致言云
一本作
放言云

と道ノ中ノ塔ノ小ノ物ノ怪ノ俗ノのノ死ノ矣ト云ク云ク

使者ノとシて天狗地ノ狗ノの説ありハあリとシて一以上ノ天狗ノと稱するハの等

からずル紙ノ志ノ一ノ上ノ古ノハとての怪物ノを鬼といひけるト

考ヘるト六ノのらるルんとるトいハ又ノ物ノの怪といひけるト

そのら天狗ノといふコト道今ノ同ノ稱ノ異ノ名ノ之ノ餘ノ聖ノ財ノ集ノ續ノ故ノ事ノ

終ニ宗ノ祇ノ諸ノ國ノ物ノ誌ノ編者宗ノ祇ノ善ノ惡ノ因ノ果ノ物ノ誌ノ亦ノ小ノ見ノえル天狗ノ

るハ諦ノ忍ノ書ノ引ノ用ノ考ヘるト抄ノせルト又義ノ經ノ記ノ秋ノ夜ノ長ノ物ノ誌ノ

奇ノ異ノ雜ノ論ノ集ノ本ノ朝ノ怪ノ談ノ故ノ事ノ等ノ考ヘるト

予ノ曩ノ小ノとシて天狗名ノ義ノ考ヘるト圖ノせルト考佛ノ書ノ多クありト

編者法ノ師ノあるトべシと考るトあるト不レ存ト又ハ天狗ノ名ノ目ノあるト強ク牽ル

予曩小とすて天狗名義考を圖せふと考佛書多あり

附會してそのよしと却愚管抄保え物語平家物語故車談
 東鑑を平記等の文と云ひしものれを引と豈穿繫鹿漏るは
 めども且先代舊事本紀不服狹雄尊猛氣滿胸腹餘
 化吐物成天狗神姫神而威強其軀人身頭獸首
 鼻長耳長牙長獸云云との服を引澄して是日奉天狗の
 え祖るるといふつふぞや近來先代舊事本紀一名大威経又舊
 と額より書美濃の黒龍の潮音和尚とつふ天狗といふ昔より
 偽抄物を取つて七十二巻と偽撰一巻といふに聖徳太子乃
 撰せし舊事本紀ありとて四十巻と入り刊行あるか如き既に
 偽書ありと云看破せられぬ板を焼失せしめたるふは偽書と

りて第一の引澄と割谷鬱津彥流して運敵へ天狗の衣冠を
 ちりたる天狗の和名はあまのござかまろりあんとしと厚くつふ
 評するつやくと移るがたるとしとさうとて中予が説をゆるすと
 つふあつたは彼が翼を纏うてりつが鼻の長髪を説かれ又天狗と
 つふまらん怪力乱神君子の語は只燈下の戲墨ありと
 童子の夜話と助るのそ
 或は同字をて妖怪を天狗といひ又破戒無慈悲邪智怪貪の
 道俗を天狗といふと五百年前のもや言ふと云抑ゆ由と
 こも現るやといふ予答て云當時の筆記はるるは當時の云を
 りてあるもの縦数百年以前の現るはとも言禁へ今うの

云々城攻りてせざる上はしらぬりて天狗の説の起る時勢をまじ
 豈天狗のそららんや不義殘忍なるりの官爵姓名不忠不孝の
 冠て唱ふとも又五百餘年前の流傳云々紫之磔言バ頼長公を宇
 治の悪左府といふがごとし人足公と不和を保元兵乱の棟梁
 といふ又源為朝二十八騎の後率の中不透間主計悪七別當あり
 惡字の義 保元元年七月十日の合戦不義不孝不忠不孝と
 未考之 又中納言兼右衛門督藤原信賴と悪右衛門督と唱ふ人平治
 又逆の首領とるふよるて又源義平と悪源太と唱ふ人叙又の
 帶刀先生義賢と怒滅とる左之 以上平治物語 又上総七兵衛景清を
 惡七兵衛と唱ふ人叙又の法師と教せぬ 又鶴岡別當

公曉と悪禪師と唱ふ叙又の右大臣と怒とるふよるて 北條九代記
 外も悪字とるけり唱ふりの有とりとも世は夢えたるもこの
 数人よるごと亦是當時のたまりきりて是より前後の月三死
 悪人のあれど悪字と被ざるは時勢のたぐひあるをこのら 夥の
 年序を経て剛強なるりの不忠と唱ふるふよるて 中條
 別強なるりのを鬼と唱ふるが博し 其まするも一 延喜八松井
 直常と鬼松井と唱ふるが如きも後々ある悪と唱ふ赤井悪右衛門の
 如きもこのも又勇教敵るりのを暴とる俗流ふ他 三浦荒
 二郎の類とて悪の暴もそのまおね 亦是時俗の變と音
 曹たる人の活眼とりて書紙讀ねり死眼りて書と流バ

暫者の市を過るが如し。殺扁投園して口をくじむ。死編と云ふことども死の益をあらん

羊をめて牛を易

牛の性はその死を畏と死のしるを畏るもの。又羊の性はその死を畏と死のしるを畏るもの。そのことと守宋の王達が明文あり。今孟子の爲に困窮せしめては、強と弱とを論じ、海集子曰、牛と羊と共よ。且未の位は居る。牛の色の蒼、羊の色の白、雑色あり。と。この意が、春陽の生氣不近なが、死を畏と死の則、殺戮と羊の色の白、雑色有り、と。この意が、秋陰の殺氣不近なが、死を畏と死の則、懼と。凡草木牛を殺るの

餘は必重茂る羊を殺るの餘は必悻稿る。後(孟子)の

曰、牛食の澆が如く、羊食の澆が如く、信矣。是蓋生殺の氣然

と致致せり。十四の面を引きて、文を考へ、その説孟子の一章を

注とす。孟子、梁惠王篇、齊宣王羊をめて牛を易と

いひ、後を按ると、王の意、小をめて大を易る、あるは、又牛を

えて、未羊をよぶる、あるは、牛の死を畏て、いふ懼るが爲よ

忍びと故よ、不忍其殺、朱子曰、殺、若無罪而就

死地、故以羊易之也。孟子、羊の死を畏て懼るもの、あるは、

牛を易といひ、しる、あるは、死の死を畏て、牛を易との妨げん

と、孟子、牛と羊の性を説く、と、只いふ見、牛未見羊也。

君子之於禽獸也見其生不忍見其死聞其聲不
忍食其肉是以君子遠庖厨也。此仁者之言所謂の
君とて堯舜ふるとのの鳴呼る不為るんと童蒙の
為小注し

實録の悵脱 讀書の益

文徳天皇實録十卷 合本 宝永六年春三月書賈刊行を
此印本殊更不悵脱多し刊行をく書賈のゆ成りゆら
俗儒漫又訓点を施し蛇足の為よと紙画さるる紙めて
あてて流て流べが次右大臣基経公の序乃とりり小松下
見林翁小書し此序菅贈大相國代基経公御文章

第七有之云奉家君教所製也。見林云と記さる
たまど忍く見林校合の存ありて特よ甚く悵
まる紙ひとる二つらん卷二十四 嘉祥三年春三月己巳云
詔佐渡國放還配流罪人金判福貴満との按さる
金判當よ金刺ふ紙一金刺ハ流人の氏ハ福貴満ハ名ハ哀の
つひやうのり放還配流罪人金刺福貴満と記さる
三代實録卷七の二十七條よ金刺舎人貞長といふ者んえり
是も金刺ハ氏ハ舎人の姓ハ舎人の両字紙脱せん又罪人
るまハ姓ハ除くさるや 上冊ハ述ハ罪人又同書卷三嘉祥
三年十一月己卯從四位下治部大輔興世朝臣

書主卒書主右京人云云新羅人沙良真熊彈新
 羅琴書主相隨傳習云云天長八年還為左京亮
 云云八年二月更為左京亮承和四年上請改性
 為興世朝臣云云按云新羅人の當新羅人小僧
 沙良真熊の沙の下小門の字の熊恐く能字乃
 撰ららんが推量して讀と死のやや小諸紙のて新羅人
 沙門良真熊彈新羅琴と流ゆると又還為左京亮乃
 還字の遷の撰左京の右京の撰らんりあらざれば下の文は
 八年二月更為左京亮とあるに疑入べし上請改
 性為興世朝臣との殿上字の下の表字を脱せり宜為上

表請改性為興世朝臣との條の撰脱を奉ふ違ひは只
 その端を奉て讀者よ曉るべし又卷十三 天皇崩御の殿の
 猶句不在位已短天之降命盖有數歟于時春秋世
 有二三の持ふまゝに撰字あり春秋世の世の當は三十ふ撰
 冊とせよ寫しあまじしをわけて撰字の隨はまゝに
 天皇の春秋二十有二是あるとせらるるや或るふや傳寫の
 誤りや或る冊とせよ撰とせよとて隨はまゝに何の事との
 解せんと春秋の世といふ世あらんや又その世の二ツあれといふ
 ありんやその印奉決して見林の校合せられんや或るふや或るふや
 實録ハ彼翁の校合あり撰脱ありといふも文徳實錄より

んまば善とよぶ

予嘗國史を讀み且善本を讀むは苦むあられども書紀より下三代
 實録に至りて刊刻既成るから予が如く貪書生も輒く國史を
 窺ふて我れより亦是昇平の餘澤ありて生平の樂事ありてよ
 りとどの條未刊の古記録人間に散在するもの多し坊賈の
 志の是奉るれば深脱最流べうべその流べうべうは我讀果せる
 これを讀書の功とこそいひめり書紙流て倦ころく苦學年を
 積とあふべ必至る所ありんと嗚呼る言ふのあはれ予ハ二十餘
 年より青雲の念絶てととく塵埃も玄同樂推くて身と
 終らんと我れはうするわは世の機を誘ともあうべうべれを知る

のハ我他の人よありつゝ我知ざるものハ又我他の人よあり
 筆小畊し意は織て餘あれば史書を購つて我他の人よ血を
 ともしよあ損益相半とつゝ漫戲の書紙編むる何乃
 餘財ありて加あは歳卷の書紙置べきあられども學て人の為ふ
 語曰古之學者為漫戲の意近は羞るの衣よ今る海寇の
 訓と隣人の四十を超てて志の定るものる也 孟子曰我四
 十不動心 己今之學者為人 漫戲の意近は羞るの衣よ今る海寇の
 衣半百も遠くもあふと言と見孫よ加んとて漫ふその端を
 ひらけり

予少かりしと好書ありたの衣よ元禄前後坊刊の草紙と市小
 涉獵て多くて且我れは弄賣くて人よ誇り或ハ古器古書画

まで今世は稀あるの紙んまじりて紙愛玩せざるにほめてや
 壯年と云ふころあるゆへ不圖文中子紙披閱する王仲淹王仲淹字希文
淹階の大業中の人溢して文仲子といふその著書その著書の書
抄篇門人と名づつ脱逸取つてことまじり
 有言曰昔
 之好古者聚道今好古者聚物予忽この語に慚愧と
 その夜さういも寝まじりて思ふ及て見る所のふる紙草紙やうの
 りの古畫古器あるととり出して見れば悉皆却つ但地理のとき書る
 そのと當時の風俗をあるよと云ふるべし草紙のこ僅小殊一とあ
 けは是より好むの並びとせど予が読書は益ありと云ひて
 あれどまじりての幸と云ふとありたりと云ふるの教経書
 中ふるらんや
書二日。玩物喪志。又老子曰。不貴難得之貨。使民不為盜。即此意。

ときある文中子を聞くと忽地お牙の非と学んるのつと
 りふふ紙まば画とあらふのそのとあ物と寫真おせんと思ひて
 ぞふすん獸よすんそのりの紙んつと圖とまじりて
 紙せる画をてんて字せばおのづから紙とありんまの学問の
 又まじり準ふべし聖人の言と窺んとあふりのたどめ四書五経を
 讀誦するともまじりて行なりとて二隔由三隔由と
 どもあるの諸子百家の書紙んをたよ日來記憶する聖語
 ぢひあつて忽地感悟するとあり故に聖賢の人よ教めり新小
 博く壁紙取ざるにほむ予が小説撰史といふも得捨ざるにほむ
 なるべし

後妻打 孝女花扇

つらく戦國の使えと推量るふ勇と好とも理小暗く智を
 貴めども奸多し目先の恥と恥とて始終の勝をわりのむを
 中ふおのづから賢不肖わつとつども大くたがふのは三百年
 前ふの妻敵怒といふと、いつて妻と人な竊盗するりの或は仕を
 辞し或は産を破る國を編歴して奸夫淫婦を撃果と紙男子
 ろつとわりのいゝとぞと別目先の恥と恥とて始終の勝をわりの
 色を吹て疵を求め恥よ恥をかゝるりの狄父雙言不與共戴
 天兄弟雙言不反兵交游雙言不同國と曲禮の凡そ
 妻敵怒といふといふまじき事文とんも及ぶと富貴貧賤その

差ありといふとつどもよべて一家のそののなることすま主人の不
 徳よりいふとも恥とてよふもばや從要ていつ日もあらむと
 いまご教る不違ふともその妻の淫るはあつて速く出せむ
 更ふ奸まを引容る日候待ちもなむくば予嘗疑ふ孔子
 三世妻を出とこの説由未既ふそ又聖賢の徳とめて妻子
 志なく和合せと祖孫おのくその妻を出さばその家そのひさ
 とつひがじいやく楊墨道よ塞り言を没て孔子を誣され由
 多りりんそ墨子小晏氏の言ふ託し自公のるれりていそく
 孔子を誣されば孔叢子小詰墨公篇あり 宋の葉氏が致十口質疑
 おひふ孔子出妻の没り墨者の誣言よあつたの必道家の僻



説るに「妻子の和合せざるより君子はあつてこそと差況て
その妻と竊りかきよ福返一産と破るが何とて又またといふ
是よりあるは死のあり元龜天正の比所謂後妻打と云ふ
後妻或は婦不能る又此は騷動打といふ
左方抄録と

昔々物語云々百二三十年以前昔元龜天正のハ女の騷動打と
いふとありしや女も昔々侍の妻勇氣と差狭し故にん殿打と
いふも同じ譬へ妻を離別して五日十日或はその一箇月の中又新
妻を呼ぶると死室初つまの妻より必騷動打企功者有る脱脱の
女と打寄合はて是非騷動打はつと云ふなりと談合極

是時男の分ハ曾非構事扱ゆ前の為たるとハ五三人有る
女不脱脱の方より君死達者有る女をさづて借り人数二十
人も三十人も五十人も百人も身代は依て相違は捨て新妻の
方へ候と遣はすこの使と家の老る者と出り口上の所覚可有
之ハ騷動打何月何日何時は可承ハ女持糸の道具ハ木刀
さつとも棒さつともあるひさつ共道具の名ハ遣は棒木刀ハ
大さな怪我有りゆ家大くさるるひは新妻の方あり老僕出合
承て新妻へハ遣ハ驚入ゆ何おもハ詫言可申とやもあり
左振弱け牛ゆハ一生の恥とて成程所ハ公認お結可申
奈何日何時侍入ゆと返る有るもあり其以後男の分ハ一切

不構最前申遣と時左右方の使一度男も其後男出合
 車不有之法也扱其日限ふ至り離別の妻糸物よ其の供の
 女ハ何程大勢も皆歩ゆりて袴袴を著袴と掛髪を亂
 又ハツガリおと或ハ洋巻るじ甲斐と交出まふてゆふ志を以て
 持腰も差押ひけり門を閉せ臺所より亂入當る女幸ふ打合
 綱金障子と打つとこの時刻と考り妻の仲人と待女郎ふ
 及び女中と先妻の婚礼の時待女郎はする女中と同時に出合
 真中へおきて扱ひ搦く綱糸をくぬと供の女共働の善悪様々
 有り貴の騒動打ふ二交二交憑且て出ぬる一七十年をくり
 以承ふ八十許の婆々ありしが我等の口より聞かハ騒動打ふ十六度

憑且て出とを流し百年をくりころころの透とこの正相止る
 々々下戦國の婦人とくとも使来るるをわくの如く妻敬養
 と同日の終るあり女ハ柔和温順る女なりと云ふさればとて武士の
 妻よりりの難ふ臨て節を失ひ流るるを惜まらあるまじき
 るふとをわと世間の婦切なる物語を讀くおほひてありとあり
 かりたるの おん時久仰へ春平の良民のよく理義を志るを
 男子のおのづから男子魂あり婦人をおのづから婦人の情あり
 かり彼妻敬養んとおのひり男と後妻打志る女とおのづから
 意持ありて忠孝節義ありと云ふるを頼りかたきと云ふ
 狐べらぬ狐とてくもるる忍びざるるを戦國の蔽風あり

昇平既ふくして市井の愚丈愚婦うろたふめとて其の狼狽物うろたふめも
 道のたゞとてろゆるものもなほ遊うたれめの女も孝この女も賞せうせられたる
 かのありたり二十餘年前北里五明樓よんげんのた扇あふたるひい
 遊女あそひ孝母こぼ孝こありとてその女を扱とて巷ちやうに賣うりのあり予
 のこゝろ弱冠じやくかんありしころそのよと申まをのくら耳みみの底そこありとあ
 ざりしよ友人南野なんやぬ一嘆賞たんせうのあり彼孝女傳かのこめだんと題だいせる小紙せうし
 二頁ふたへとておろろあるふとの比ひの商舶費せうはくばい晴湖崎陽せいこさきやうありとの
 孝娼妓こそうぎがる紙し竹たけ皮かわて感佩かんぱい一漫いつまんよと紙し贖あがする詩草しそうとある人
 翁おきな弄あそせしふ南野なんやぬ又一紙ふたへをて表装ひやうさう一彼かのた扇あふが艶えん簡かん
 とふ帖たての末すえよめり煙花えんか三絶さんせつと題だいして今いまふ秘ひ存ぞんせられ

予曩いふさ人ひと小借ちひりて弟子でし琴きん梧こく影写えいげふらうとせし紙し周しうふとふ
 哉やとて身み彼かの持もち女にのふと風流ふうりゆうありて書紙しよしよくせととこれと
 世の人ようあるめどその孝こありふ至いたるのいふととてふるものもある
 ぞ予よはその風流ふうりゆうと能書紙のうしよし取とりて孝の一字いちじ小愛せうあいるものむし
 名なも持女もちにや世よ親おやとて仏ぶつの道みちありて或あるは歌うたとよく
 集あつまへん入いりて或あるは貴人きじんよとて今いまふ名なのゆえなる由よしも
 かと称なづと媚こ紙し献けんと欲よくと鬻ひやくりの孝ことありて賞せうせられたるその名異國いこくの
 とくゆえたりけんとの未嘗みさう有ある美談びだんもむしや予嘗よさう孝子の
 初狀しよじやう記きして巷ちやうに賣うりて嗚なび声こゑとゆえたりは必かならずともふたつとて
 購かひせし紙し讀よむる毎ごとふいふやは字あざよくなり彼由人かのよしひとのふるもの



お花扇のおはげは... 母あやしの... 雪つも... 不仕合打つ... ひとりのお人おたわ...

それより... 花扇に... 母あやしの... 雪つも... 不仕合打つ... ひとりのお人おたわ...

京雜記卷下

京華詞卷一
三三三
綽約冰姿似紫雲清
歌妙舞更能文備行
孝道無雙侶聲譽
京華得上闕

名擅青樓第一人天
生百藝妙通神憐
余長作天涯客碧海
蒼茫欲問津

江戸有名妓花扇者美
有姿容涉獵文藝家有
老親更能曲盡孝道余素
崎陽十餘年矣嬌麗靜
美風流跌宕之輩雖

不乏人獨難其孝而能
文也余削之不勝神往
因賦二絕郵寄云

苕溪費晴湖



汝亦も又人の子まらんと云ふるの及ぶる云々の雲壤のたぐひあり
 彼歌舞伎の番付あると賣りの呼声を呼とたの草履を靴由
 あむき出て呼ぶるものものありと一財のふ取取のこの
 孝の記と目とあつてして云々云々せよと云ふと云ふと云ふ
 彼莊周が言を云ふと道在屎溺と云ふは狂女をいふに似たり
 りとの圖を觀この説を云ふ蓋て貌を改る女子もあらん云併
 昇平淳化の餘澤あり又仰ぐよりてをいふ後妻打の云を
 録と今昔人々の清濁を童男童女小論との云亦是の云の
 老婦をいふと云ふる孫忘れり曾呂利咄卷二は教月上人統案ありある女房ありあり打
 ちのよと云ふと云ふる世の中女のいふと云ふ女牛の角や云ふまある也
 浮瀬

大坂は浮瀬といふ酒樓ありと云ふ白菊君不識るといふ大
 酒盃あると云ふ飲みのその名と傳ふと云ふ亭主は生物を
 こまぬかきと云ふ按と云ふ浮の罰盃あり今俗の酒を云ひ
 と云ふ小抄に瀬の助字は晏氏春秋卷之三下 景公酒を吞
 田桓子侍晏子と望王見て公は復て曰諸浮晏子公曰何故
 ぞや。毎字對て曰云云晏子坐と酌者觴を奉て進之曰
 君命浮子晏子曰何故ぞや。田桓子曰云云今子緇布
 之衣麋鹿之裘と衣の核軫之車ありと駕驚馬以朝
 是則君之賜を隱と也故浮子。晏子避席曰云云又劉
 苑臣術の篇に載浮字の義と云ふて明と云ふと云ふ彼酒樓と大
 ちり文と此同

房の誰の馬かあるとたぐぬまは彼馬とりそのまゝ鳥帽子と
 かづり足拍子狐踏この麻糸と中とあるらるる草袴
 茨うらまの鉄兜鶏のとりま鳥帽子何じ慶次の馬あてゆ
 と幸若と舞てもなり々人のたぐぬま毎あてのどしよまあて
 組幸若の舞さぬままとりるる参考なり

先板の訛舛

予が曩小著しる燕石雜志の例の倉卒の同本草なりければ
 恨まるるの少くはあれども刊刻速ふりしうはつふともさるべ
 ろくて然止らりて彼篇世まびらるる友人静廬子園せんと
 請ふ予がしるる子の和漢の奇才ありんふ隨て愕るとあらば

けが為ふこまは正し解の至愚なれども非を飾るとさるる
 こを辞とさるるのさるるに廬子と改て考正とと二十餘條更ふ
 雌黄と施してこまは還さるる中ふまの追て考ねらるる暗合
 ともあり又うら驚きさるる條も多し又友人こまのさるる
 ふる難せしこまの條もありたり人その愕と告るるたの聖者さる
 こまは幸とと解の小人あり且孤陋ありて考と博くばりこれと
 幸ととさるるさるる今自他の批評を併記しりて迷をばゆふ
 こまは又傳る町の馬字と脱し弱冠と弱官ふ愕るるがどれと人愈
 るるふ隨てその愕るる條もさるるこれらと漏れり

卷一漢壽亭侯印の歴
 その國好古日録よんえり
 同書ふ宣和集は我とる示るる
 備書愕るる

宣和集の下古印史の二字は脱り當作宣和集古印史

同卷怪刀祢の履水鏡 欽明天皇の履云々野干と云ふと申す付く云々 静廬子云々水鏡の

説へ日本靈異記ふええと云ふ ○おろし履師大納言経信卿の履白龍之魚熱懸預諸之

寮網寮網一廬云々按よる寮へ一本密小似る紙と云ふと魚勢を

本作獵網 句と云ふ一は経信卿文選の文と晴誦と云ふと西征賦

彼白龍之魚服掛襟且之密網とありて魚勢と云ふ

経信卿晴記の失之解再按ふ莊子外物篇云仲尼曰神

龜能見夢於元君而不能避余且之網云云この比喩左傳及

同卷物の名の履津ハ船の通る所なる通説解再按よる院藉

莊論云通謂之川トクワイ回謂之淵エト 本邦あて川字を通と

訓せしむるに本字つひに津の訓もその義おほし又余雅の川の下を案する通回の云々

注疏あり但説文云川貴通流水也 ○同履子六月村と書てそをそ廬云々按よるふ

兼穂録云々美濃ふ六月村ありそら村とよぶえ来云育字

あるが標て二字よりあるるる ○同履古歌は物の名も亦ふ

廬云々古歌當作連歌菟玖波集十四雜連歌 草の名も

取よるるるるるる 難波の芦のの濱荻 赦海法師

同卷苗字の履文 德實録云々 嵯峨天皇誕生有乳母姓神野先朝

天皇諱云云之制每皇子生以乳母姓為之名焉故以神野為 解再按よるふ 孝謙天皇の諱を阿因

と云ふる 桓武天皇の弟一名を山都と云ふ 平城天皇の

宣和集卷下

三三

序一名と安殿とありしおのひと 淳和天皇の序一名と大伴とありし

せしむるその乳母の姓るべし

卷二時代不同の歌合の段おのへべき袖こそるけ世の中ふ集はれた民の冬乃より多く 十訓抄より云

廬云古事十訓抄及月清集あつ下の句あづけん民の

さむらひらなくとあり月清集あつ三の句世の中のとあり

同卷房藻の段雲鏡のうれ世とてるを要見く事 其角或は云云 按する小窓鏡の房藻と懐る其角が詠草あつ假字

みてヤト藻と書するヤとマはあつまえよ窓と書て云云 ある人云ヤと藻と片假名あつヤト

藻とあつバトともありみまづべりむらゐて書くべしを

や小懐るもあつげ且五元集あつ其角が自筆の詠草を板

するより青原が序あつり子が説証するあつげヤとの解

陳じて云ひけるものヤの字下の結びを失へバヤふらじヤ字

の下と結びバあつるこあつればひらねことあつやをよ懐る

あつたあつげ又五元集あつ其角が自筆のあつ板するあつ

年序いと後あつるれば文字のおあつるたを補ひるあつ

あつ其角も懐る字紙書いとあり窓バ門戸の國を樹はる

窓は書する類こあつると思が解をゆるるといふあつあつ

る月注とあつるあつれども長け色バ別あつるあつ

同卷鬼神論の段村岡五郎貞通又今昔物語は 解再按するあ

村岡五郎平良文の高望王の季子あつて従五位下鎮守府

將軍より著聞集今昔物語等あつ所謂平貞通も又村岡

將軍より著聞集今昔物語等あつ所謂平貞通も又村岡

皇朝新言卷下

三十一

五郎と稱と良文の子孫あり

卷三鬼神餘論の跋 白癩病原論云一云白癩之良安太今俗云

太豆波 序云白癩の白くもふあふとど白るまろこ歴易病源論云一云奈万

ともあろくぬとひるらん解陳と云癩の癩風斑片あり

紫白の二種あり白よ又二種あり世俗のまろくもといひ白るまろ

の種類と改裝の中へいであるを白雲と名けしるの

同卷園東の跋 十訓抄又匡房卿と云うと云云系人あて内裡と云ふ

序云この跋匡房卿のものとせし十訓著園等の懐

るり匡衡のるり匡衡家集後拾遺集古今昔

物法集等ふんえしる

同卷俗字考の跋

唐蕭昺不識字嘗以伏臘為伏獵又一日張九齡送羊刺梅蹲鴟蕭以為鴟鴞云云

解再按ふこの世活類氏家訓ふんえしる

但そのり異同ありかき秘てさる考證と顔之推云江

南有^一權貴讀誤本蜀都賦注解蹲鴟羊也乃為

羊字人饋羊肉答書云捐惠蹲鴟舉朝驚駭不解

事義之後尋迹方知^{家訓上卷}こも同時代の物なりと五

雜俎は蕭昺がるとせし別は出知あべし亦復考索を死する

同卷正儀義隆の跋 義隆朝臣を藤倉大草紙振舞記 解再案

ふる不豫倉官領九代記も義則不知義隆義隆義隆則同

人異名なり例せば源義経の名成去べく呼更らるる

卷四 閩東方言の蔬

菜蔬の類をいふは魚類とも或難く云

菜ハ蔬魚とも不通稱する言あり必野菜ハ限らざるを宋

趙与音實退録云靖州圖經載其俗居喪不食酒

食塩酪而以魚為蔬今湖北多然謂之魚菜不特

靖也國俗の魚菜と稱するの意あり解陳して云魚菜

とも不和訓なりさうねといふと死の魚蔬ともふらちありし

いふと勿論の假ありせ物とさふと音は唱るる此の如く

去るぬとあり異邦の俗の去るるべし○あやの腹は

番椒味噌のこみやや 此の腹は子味噌とありては

序子彈きとて云々太平記のこみ番椒のありては

草子番椒古書ふんえと近代の書は出たり秀吉公伐朝鮮

時彼國より持ちとるる高麗胡椒といふとあり

あや考んとて浅きあやあやとあり○あやの腹は

縁人といふゆゑこゆまといふあやをて籠字を當たり

と云て梵語あるより注しとて出知詳なるは

物とありとありなり 序云須利ハハ梵語雜名

の焼かぬ翻譯名義集は朱利草秦言賦とんえ

○あやの腹は 念袂杜騙と胡麻の蠅と名つけ

稿と脱其んせなるべし又云門迷のりあり

かといふ語のありは神とるや後撰集春中

藤原與風

後々六よりらぐひら懐る物とるあまるといふすし本文ハ
あまるといふ益るに辨るれど姑葉を存と

同卷團頭の隙 氷許傳ニ云云一面七竹半團頭鐵葉 序云鐵葉護身

枷ハ鉄の枷るべしそのあハ七竹半とあるあてある竹數又定

あるりのあ本あて製とると此ハ輕重とありかてけまばりの

考より予も考べし解陳とて云只鉄の枷とあると、葉字の

あまるといふ證文とて考へてこの篇刻成る比序子又云

件の枷の木より鉄とあると三才圖會よりて予が鏡の非あるとありぬといひ

疑れるとていふ免の枷の終を海舟とありぬ後初の中とありぬあり

『とありぬ』のあまるといふ人よありぬぬ家もあまるとありぬをわら松の

葉よりとていふ宿と人よありぬぬ漢又海舟とありぬの出羽の秋田の葉米氏

件の終とありぬと城下の骨董店よりありぬ廣貫卷の十二ノ我より

同卷猿蟹合戦の隙 有波斯常一 序云有波斯常とあると

序ハ波斯ハ波斯國より備書のおあまるといふ○あまるといふ

因ふり云云戴 石屏詩云云 序云戴石屏ガ詩とあると一宋戴復古号石屏

小傳見宋詩鈔宋詩紀事等

同卷舌切雀の隙 序云この比の物より 廣新聞小舌切雀ハ

佩 とありぬ

同卷鬼太の柄の隙 鬼ふりぬる狸ハ彈三郎狸ガ 解再按とありぬ

佐治の狸と鬼の外とありて獸なり故は彼土俗この物よりハ

本州より出るといふあやあん彈三郎とありぬの釈とありぬ

傳の怪とありぬ又按とありぬこの隙古事記を引べしとありぬ

東雅巴卷一

二五

かしらしうりた己貴命鯉とたさけて鬼と懲りぬん後考ふ
なりしものこの物語の父母あらん致

同卷浦嶋の子の故不列子と引ぐり遺忘せり列子湯

問篇五禹疆注張氏引大荒経曰北極之神名禺

彊靈龜為之使うら嶋の子の釣つる龜化くわしてい仙女とるり

とりの全くたまるよれ

卷五上羽川珠重の辰藤浪當作藤沼備書の

ゆ小懐る

同卷我妻也の辰引とるの書を出しては明人の癖を序云シ我妻

也ハ宋の沈俶が諧史を出して又顔書纂要を明人とのるは

ありこの書二種あり撰者ハ明の璩崑玉と清の周魯ありこふ

引りのハ周氏の書をまは清人より解陳して云シ璩崑玉が纂要

あり古今の二字を冠して予二書ともふを弄と云一時の失也

同卷伊豆海の辰序珠録云廣東序珠の珠とりの云輟畊録

より希宋の范大成が桂海虞衡志を出して

卷五下六郷橋の辰序の橋ハ元禄年同辰の出ありてり壞されし

大和名不濫解再按する小元禄十七年の春由之軒政房とりの

の著る准袖海と題せる草紙の卷の三よ云シ六郷の渡

ても三月より九月までの土橋ある云云こまよ由て観ると云はる

六々の取はしるりハ元禄の木の致とりびと天和貞享の

比あてもあべーある人の所著宝永年間の道中記あり六の橋
の園ありといふは假橋あり但大和名所鑑あり六の橋あり
欄干ありといふは假橋ありありなるを参考すべし

同卷西江月東坡赤壁懷古 序云念奴嬌念奴嬌之詞云云と点されしもの

張心填詞名解念奴嬌一名百字令一名壺中天念奴

天室中名妓善歌とありよとてこの條疑あり此日考と

んせなむべし

同卷連歌の段連歌の式ハ建保年間 序云建保ハ建治より

べー公卿補任と按するふ為相々の弘長三年癸亥の生きたるは

建保より後と四十餘年あり但建治とよるも疑ひるはよ

あむと建治四年是年降ふなりとて十六歳のときと

連歌の式なりなりとて考ふべし

同卷鐘聲追考の段連編ハ唐の世小の 序云蓮漏ハ唐ハ

そとあるふあむと晋の惠遠をよめて制表せるは國中補補見え

たり又按する漏刻ハ初学紀ハ梁漏刻経云

漏刻之作蓋肇於軒轅日宜乎夏禹之代とあり

その名と久し漏とあり即水を用るは漢文ハ漏以銅盛

水刻節晝夜百刻とあり又周礼契壺氏注ハ以水守壺

者為沃漏とありこの條よとて穿鑿足ざるふ似たり

○同段

太平記云云大塔宮云云赤地の錦の序云己時云云のよハ太平記より

鎧直衣のよハ時あるを透向よりく召ん

新よる由源平盛衰元卷十五よ足利又太郎ハ西の者小町
出て云云よろい ひびきハ緋威ひまどいハ金物かねものを打未巳時うちまゐりとと見え一りどてこととハ
引ひぎらふや

同卷十二おついで獸追考けものおしりの段段 日本後紀卷六延暦廿三年八月日本後紀天子暴雨あまのつひ
歎なげ曰朕不わがみづか解再とく按おしむるふ類聚るい國史くに卷三十四天皇生帝王不あま降ふの跡あとハ

利り云云云云 解再とく按おしむるふ類聚るい國史くに卷三十四天皇生帝王不あま降ふの跡あとハ

このことを収おさめり但たその文ぶんとあるある今いま流布りゅうふの日本後紀ハ類聚

國史くにと抄録せうろくせりハの款くわん

同卷どう凡俗ぼんじやく或同あるの段段 月額げつがくハ云云太平元卷五解再按おしむるふ年山紀ねんざんぎ

聞き小玉海こたまうみと引ひて月額げつがくのさらら又安齋翁やすさいおうの秋草あきくさハ由玉海ゆたまうみ

沙石集させきしゆ撰集せんしゆ抄せう太平記たいへいき等ら引ひて月額げつがくのさららと辨べん證せうせりるハ

と收おめとてらよら引ひぎらふらハ但た秋草あきくさハさららと逆さか氣きの義ぎこと

あらのら思おも案あんよらあらハと

同卷どう嶋子しまこ考こう或同あるの段段 兼かね頭あたまハさらら比ひままハさらら解とく云いハさらら春

不ふ圖と君きみ羊ひつぎ書しよ類るい後ご目録もくろくと抄せう録ろくせりるハさらら百ひゃく三さん十じゆ五ごの中なかハさらら浦うら嶋しま子こ

傳でん及および續つづ浦うら嶋しま子こ傳でんありるハさららのら書しよ今いま亡なびびるらハさららあらハさららと

いいふらハさららかかんんのらとらのららら序しよ子こよりらハさらら又また群ぐん書しよ類るい後ごのらとら

りてら考こうとらとら

同卷どう熱田あつた春はる敲くわ門もんの段段 熱田あつた大神おほがみ官くわん南門なんもんの類るいハさらら尾張おとぎ名な護ご屋や

あるら古文ふるま云いハさらら南門なんもん當あた作しよ東門とうもん丹波たんぱ丹州たんしゆ當あた作しよ田嶋でんじま丹

波な春はる敲くわ門もんハさらら南門なんもんよらあらハさらら春敲はるくわのら二に字じと考こうてら東門とうもんあるらよらハさらら

彼雜志と園とるりの更ふこの條々をのりんが予が他の功を竊する

聊勤る久あらん 又の先板昔詰質屋庫と類世冊子の中は皆めりて孔昭が陣文鼓の履は諸葛孔明異傳の後は附くる宋の張敷まが

諸葛忠武侯傳及隋の文中子と後明の王世貞が説亦さう引とありてこれと義に止ぬ

又儀藤太が龍宮への後へ全く故事をうりて栗津冠者が龍宮へ入りてありて根へ死する地符

ありて長良より一年序と推して死の藤太の お門と同時の人のまさう藤廬子りりり

因ふこの後卯花園漫録といふ草紙の巻あるを存とつるふその

一巻を覽せふ多く古人の説を書りあてて其書名を引さうとが中ふ予が

西條の記せよとるど裁りたるがその書名を引と編者自説のやうい書

ありて其の予が隨筆ありとるゆのん秋よりてらふエとの

荒木藏

皇雜の記前件集巻下終

